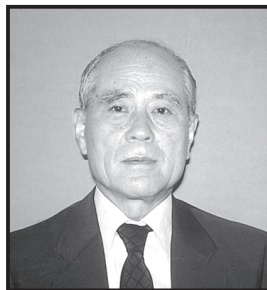


名 誉 会 員 追 悼



故 名誉会員 中川 一 氏

社団法人日本鉄鋼協会名誉会員、元新日本製鐵(株)副社長 中川一氏は、平成22年10月16日、ご逝去されました。享年84歳。ご逝去の報に接し謹んで哀悼の辞を申し上げます。

氏は、昭和28年3月東京大学工学部冶金学科卒業後直ちに八幡製鐵(株)に入社し、39年八幡製鐵所製鋼部製鋼技術課長、45年新日本製鐵(株)発足後に、49年大分製鐵所製鋼部長、さらに昭和58年取締役光製鐵所長、60年常務取締役八幡製鐵所長、平成3年代表取締役副社長、平成5年常任顧問、平成7年から9年まで顧問の各要職を歴任されました。

氏は、八幡製鐵所において、昭和40年代以降の日本鉄鋼の大躍進への確固たる基盤の確立に注力されました。中でも、戸畑新第三製鋼工場の建設を中心とした製鋼工程の抜本的合理化、鉄源の戸畑地区集約の完遂は、今日の環境問題への対応を先取した製鐵所像としても価値あるものでした。上底吹き複合転炉操業法の確立、6重式圧延機を世界で初めて取り入れた新熱延工場、新方式の小径シームレス鋼管工場、さらにCC-DR技術の発展的導入や新冷延工場の企画など、既存の設備およびレイアウトの革新、合理化を進め、同所を高級鋼を含む多品種新鋭製鐵所として再生されました。生産維持下での新鋭化という日本鉄鋼業が早晩直面する課題にいち早く着手し、我が国鉄鋼業の近代化に大きな貢献をされました。また、国内のみならず海外への技術指導にも尽力され、特にマラヤヤワタ製鐵所にあつては、自らリーダーとして長期にわたり注力されました。

その間、昭和46年から昭和53年までの7年間は、大分製鐵所において世界初の全連続鋳造製鋼工場の操業立ち上げの責任者として、現場の第一線にあつて高能率連鋳設備に関する設備、操業、管理の全面にわたる技術確立と連鋳品種の拡大および品質安定化を進め、当時の水準を遥かに上回る連鋳機1基当たり生産量16万1千トン/月の世界記録を早期に達成し、また圧縮鋳造などの新技術による高速大型連続鋳造技術を確立されました。

さらに、昭和58年から昭和60年の2年間は、光製鐵所所長として分塊圧延省略化技術の開発により、従来複数製鐵所間に交錯していた工程を自所単独生産化する一方、パイプをコイル状に巻いた長尺小径製品の開発や電縫管製造範囲の拡大などにより、光製鐵所をステンレスの板、線、管を始めとする高級製品の製造基地とする基盤を築かれました。

氏は数多くの要職を歴任されてきた中で、製鐵事業における一貫製造コストの重要性を強く意識され、高度化する需要家からの品質改善要請に対して、強いコストパフォーマンスに支えられてこそとの考えで、本質的な対策を講じることを指向されてきました。製鐵所鉄源能力の適正化についても強い指導力を発揮される傍ら、技術の先進性には、強い執着を示され、あらゆる類の着想にも、謙虚に耳を傾け、細かいところに拘ることなく、その包容力の大きい人柄は、チャレンジしていく若手にとって、自由闊達に思考を発展させると同時に、自らの責任を強く自覚させる絶好の機会となり得ました。古武士の風格を持ちながら、自然体を旨とされ構えることのない姿勢に、多くの者が親しみを感じ、活発で率直な議論の渦を大きくされてきました。強い正義感から、社内外の多くの問題に於いて、正論を堅持し、安易に迎合することなく、ものごとを真正面から受け止め、対処していかれる姿勢には、大学関係をはじめ、顧客、業界関係者からも高い信頼が寄せられてきました。

氏は長年にわたって本会理事、評議員、企画委員会委員長、(社)日本鉄鋼連盟技術政策委員会副委員長、(社)日本溶接学会副会長などの他、政府関係委員会委員などの公職、数多くの団体の要職を歴任し、鉄鋼技術分野に留まらず、広く我が国の科学技術振興にもその深い学識と豊富な経験によって多大の貢献をされました。氏のこれらの業績に対して、本会より服部賞、渡辺義介賞が授与されると共に、名誉会員に推挙されました。

氏が鉄鋼技術と本会の発展に尽くされた多大なご業績を偲び、会員一同、心からの哀悼の意を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成23年1月

日本鉄鋼協会 会長 友田 陽